

「経営者のための情報Note」 Vol. 91

		タイトル、及び配布例				
		病 院	診 療 所	歯 科 医 院	福 祉 施 設	一 般 ・ そ の 他
A	 Philosophy Note フィロソフィ ノート	<今月のタイトル> 「いのち」を活かし、楽しく意味ある仕事・人生に				
		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
B	 Medical Note メディカル ノート	<今月のタイトル> 認定看護師、全21分野で1万8,728人に				
			<input type="radio"/>			
C	 Dental Note デンタル ノート	<今月のタイトル> 歯科医院の増収・増患に向けた経営改善				
				<input type="radio"/>		
D	 Welfare Note ウェルフェア ノート	<今月のタイトル> 人口10万人当たりの看護師数、最多は高知 他				
					<input type="radio"/>	
E	 Environment Note 環境 ノート	<今月のタイトル> 「農業一本で食っていく」				
		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
F	 Topics Note トピックス ノート	<今月のタイトル> 骨髄ドナー「実態知って」				
		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

「経営者のための情報Note」は、当財団より毎月提供いたします。



Philosophy Note

「いのち」を活かし、楽しく意味ある仕事・人生に

■ 「いのち」とは

「いのち」とは、『命』と書き「生物が生きていく原動力。寿命。一生。生涯。」を、また、『生命』(=いのち)と書き「物事の存立にかかわるような大切な点やもの」を意味します。つまり、「いのち」は森羅万象(宇宙空間に存在する数限りない一切なものごと。)に宿ることになります。そして、その宇宙に存在するあらゆるものには、絶えず宇宙に遍在する生命エネルギーが、命(=「いのち」)を吹き込んで全ての存在を「生かそう」として機能しているとも言われています。さらに、皇族・大臣・事業家・俳優を始め直接薫陶を受けたものは10万人を数え、延べ100万人を越える「財団法人 天風会」を創設した中村天風師は、「本当に幸福な人生を生きたいと思うなら、何よりも忘れてはならない必要な人生の心掛は、自分の命に対する自己認証を高度にすること。」と、自らの人生に於ける「いのち」の大切さを覚知することだと説いています。

■ 「いのち」を活かすには

そして、中村天風師は、その著『成功の実現』の中で、「いのち」を活かすには「自分の心(=考え方・意識)を明るく、朗らかに、生き生きとして、勇ましく、どんな場合であろうとも、心の輝きを曇らせずに生きようとする。」ようにすることが重要で、そしてそれは、「造物主(=サムシング・グレート=宇宙や生命をつくり出した偉大な存在)の心と同様の心持ちになること。」つまり、「そのようにすると、造物主の無限の力が生命の中で無条件に自然と同化力を増大してくれる。」と説いているのです。

また、「人間は、ただそれだけの存在で考えれば極めて小さいが、しかし、その心を通じて常に、自分の生命と造物主とが結びついている。それは、運河の水が運河だけで考えると極めてわずかな水量しかないようだけれど、あれは、大海とつながって存在しているのと同様なのだ。」と例えています。つまり運河は、見た目は小さくても無限の大海の水量とつながっており、心の持ち方を積極的にしていくと、結果として推進力が増し「引っぱる力」に「押す力」が加わり、人生が大きく好転することになるので、心の持ち方が「いのち」を活かす上で極めて重要なのです。

■ 「楽しく」、意味ある仕事・人生にするには

「楽しい」とは、望みが満ち足りて不平がなく、楽しく心地よい心持ちの状態を言い、分かり易く言えば、それは、「自分が役に立っている。」「自分が必要とされている。」など、自己の存在が認められている生活環境の中で認識されるものかと思われます。従って、楽しく意味ある人生を過ごすには、中村天風師の説く「自分の命に対する自己認証を高度にする。」ことが必要で、そのためには自分の「いのち」の源であるサムシング・グレート存在を自覚し、謙虚で感謝のある反省の日々を送ることが不可欠となるのです。具体的には、個人生活では、『人生二度なし』の根本認識に徹し「生命あることに歓喜と感謝して『限りある人生、共に限らない真の豊かさを求めて』自らの人生(=生まれてから死ぬまでの間)を全機現することが大切になるのです。また、仕事に於いては、人・物・金・情報・時間・空間などの全ての経営資源が保有する「いのち」を、最適に活かす(有効に使用する。ムダにしない。)ことを基本におくことが、大事になるのです。





Medical Note

認定看護師、全 21 分野で 1 万 8,728 人に

《公益社団法人 日本看護協会》

日本看護協会は8月7日、「第25回認定看護師認定審査」を行い、新たに1,478人を認定看護師として認定した。1,671人受験、合格率は88.5%であった。これにより、認定看護師は全21分野で合計1万8,728人となった。認定看護師は、高度化し専門分化が進む医療現場において、水準の高い看護を実践できると認められた看護師であり、中でも、認知症看護認定看護師が今回1,000人を突破。認知症看護認定看護師は、認知症に関する専門的な知識や技術を有し、今後も増加が予測される認知症の人とその家族に対するケアや、認知症に関する知識の普及・ケアサービス推進の役割において、専門性を生かした活動を行うことが期待されている分野である。

認定者が1,000人以上の分野は、7分野となり、最も多い分野は「感染管理」（2,744人）、次いで「皮膚・排泄ケア」（2,419人）、「緩和ケア」（2,211人）、「がん化学療法看護」（1,530人）、「救急看護」（1,205人）、「集中ケア」（1,169人）、認知症看護と続く。

認定看護師が所属する施設は、病院が最も多く（90.0%）、次いで訪問看護ステーション（3.4%）、クリニック・診療所（1.3%）の順。訪問看護ステーションに所属する認定看護師を分野別にみると、最も多いのは「訪問看護認定看護師」で365人、次いで「緩和ケア認定看護師」が145人、「皮膚・排泄ケア認定看護師」が41人と続く。クリニック・診療所に所属する認定看護師については、「不妊症看護認定看護師」が72人と最も多く、次いで「緩和ケア認定看護師」が47人、「糖尿病看護認定看護師」28人と続く。

全都道府県に、100人以上の認定看護師が勤務（就業していない場合は居住地）している中、500人を超える都道府県は9（北海道、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、愛知県、大阪府、兵庫県、福岡県）。また、認定看護師が所属している病院の割合は、最も割合が高いのは山梨県（65.0%）、次いで秋田県（53.6%）、滋賀県（49.1%）の順である。

認定看護師になるには、看護師として5年以上の実践経験を持ち、日本看護協会が定める615時間以上の認定看護師教育を修め、認定審査に合格する必要がある。認定看護師教育機関は2017年現在、全国で54機関100過程が認定されている。





歯科医院の増収・増患に向けた経営改善

■患者様満足度の向上のためのカウンセリングシステム導入

多くの患者様は、単に虫歯の治療だけでなく、歯に関する様々な要望をもって歯科医院を訪れます。多様化した患者様のニーズに対応するためにカウンセリングシステムを導入し、来院患者様と個別にコミュニケーションをとることで、ニーズの把握が可能となり、また、患者様と歯科医療従事者との信頼関係を築くことができます。その上で、口腔内の現状や今後の治療方針・治療計画を説明することで、キャンセル率や中断率は減少し、また、保険診療と自費診療の違いについての情報提供を行うことで、患者様の潜在的なニーズを引き出して自費率を向上させることにもなります。

以下にカウンセリングシステムの導入にあたっての成功ポイントをまとめます。

① カウンセリングを行う「歯科コーディネータ」の任命

診療方針・診療計画の直接治療に関わる部分は歯科医師の対応が必要となりますが、その他の部分は、人の話をよく聴き、ある程度説明能力のある歯科助手に任せます。役割分担をすることで診療効率が上がり、コーディネータ役の歯科助手もやりがいを感じ、ひいては、仕事に対するモチベーションを上げることができます。

② ユニット1台1時間当たりの目標売上と適正人件費の設定

新たな業務が増えると従業員から人手不足を訴える声が起こりがちです。しかし、その度に人を増やしていたら経営は成り立ちません。基本的には、今いる人材の中からコーディネータを選びますが、その際に最適な人員配置を考える必要があります。ユニット1台で1時間に平均何人の患者を診療するか、1人の患者は平均何分かかかるか、そのうち歯科医師、衛生士、助手、コーディネータが何分関わるのか、そこから適正人数を算定し、ユニット1台時間当りの目標売上高と人件費を設定します。

③ カウンセリングの際の患者様へのヒアリング項目一覧、対話マニュアルの用意

これは、歯に関して患者様の要望を聞きだすためのマニュアルです。何を期待して当院に来院されたか、これまでの歯科治療の不満足点、予防歯科や検診への関心、自費診療についてどう思うか等が考えられます。

■従業員満足度向上のためにすべきこと

従業員満足度の向上のためには、まずは院長の経営理念・経営方針が明確になっていて、それに従業員が共感していることが必要です。そのために院長は従業員へ定期的にその意味するところを伝える機会を設け、日々の業務で問題が発生した場合には経営理念に沿った行動指針を示します。また、採用の際も当院の経営理念に共感できるかを採用基準とし、採用面接では応募者の受け答えが、その基準をクリアしているか否かで採用の判断をします。

次に、スタッフミーティングを実施します。院長の経営理念・経営方針に基づいて業務を行うと言っても、従業員は日々の業務の中で自分の行動は正しかったのか不安に思うことが多々あります。また、意識の高い従業員は医院を良くするためのアイデアを色々もっています。そういった従業員の疑問や質問、意見を医院全体で共有することで、自分たちが日々どのように行動すればよいか分かり、医院に一体感が生まれます。仕事に対するやりがいを感じるようになり、満足度は高まっていきます。

その次の段階として、目標管理制度の導入をします。従業員と個人面談を行い、各人の重点課題と当院が期待することを伝え、それを受けて従業員自身が今後半年間の目標を設定します。それぞれが立てた目標に対して随時フォローを入れながら、2ヶ月に1回程度の頻度で進捗状況の確認をして、半年に1回達成度評価を院長と本人の両方で行います。院長は本人が成長したところ、頑張っているところを最大限評価し、その上で今後の課題と期待する点を示すことが重要です。





人口10万人当たりの看護師数、最多は高知

～厚生労働省の平成28年「衛生行政報告例」の結果

厚生労働省は7月13日、平成28年の「衛生行政報告例（就業医療関係者）」の結果を公表した。それによると、人口10万人当たりの看護師数の最多は高知の1,409.0人、次いで鹿児島（1,311.1人）、佐賀（1,277.7人）などの順となっている。最も少ないのは埼玉（636.8人）、次いで千葉（673.5人）、神奈川（686.6人）などとなっている。一方、人口10万人当たりの准看護師数を見ると、宮崎（593.2人）が最も多く、次いで鹿児島（584.9人）、佐賀（574.3人）などの順だった。最も少なかったのは神奈川（98.0人）、次いで東京（98.9人）、滋賀（129.4人）などとなっている。

■ 看護師が最も多く増加するも、准看護師は減少

平成28年末現在の就業医療関係者の実人員が前回（平成26年末）に比べて最も多く増加したのは看護師で、前回から6万2,618人増の114万9,397人、増加率は5.8%だった。一方、調査対象の医療関係者の中で准看護師のみが減少し、同1万7,042人減の32万3,111人となっている。「衛生行政報告例」は、原則として就業医療関係者（免許を取得している者のうち就業している者）等について、就業地の都道府県知事に届出のあった数値等を取りまとめている。



平均寿命が男女ともに過去最高を更新

～厚生労働省、「平成28年簡易生命表の概況」を公表

厚生労働省は7月27日、「平成28年簡易生命表の概況」を公表した。それによると、男性の平均寿命は80.98年、女性の平均寿命は87.14年となり、男女ともに過去最高を更新した。男性の平均寿命は、過去最高だった平成27年の80.75年を更新、女性は同86.99年を更新した。国別に平均寿命を見ると、厚生労働省が調査した中では、日本は男性、女性とも世界のトップクラスだった。

平均寿命の男女差は6.16年で、前年より0.08年減少。主な年齢の平均余命を見ると、男女とも全年齢で前年を上回っている。



Environment Note

「農業一本で食っていく」

— 農業の挑戦者 —

■ 苦難乗り越え栽培技術確立

旧北川辺町（2010年加須市と合併）は県内で唯一、利根川の北側（左岸）にあり、茨城と栃木、群馬の各県に隣接している特異な地域だ。谷中湖を望み激動の歴史も経験した。利根川と渡良瀬川に囲まれた豊かな水田地帯だ。北川辺は県内でコシヒカリを初めて導入し、代表的な産地に成長した。栽培技術を確立し、原動力となったのが「北川辺米の会」だ。会長の小倉和夫さん（64）は集団化で農業と農地を守ることに貢献している。小倉さんに聞いた。（福井広信）

■ 転換期

高校を卒業した昭和45（1970）年ごろ、ちょうど高度成長期だったので農家の跡継ぎも、他産業に行った時期。「三ちゃん農業」なんて言葉があった。農家をやるというのは、一種、変わり者みたいな感覚で言われた。「就職した方が金を稼げるのに、いまどき苦勞して、農家なんかやることないよ」。そんな風潮だった。

6人きょうだいで男1人。ごく普通に農業を継いだ。どうせやるなら農業一本で食っていくと、専業農家を目指した。（数少ない）農業の跡継ぎとして、町でお祝いしてくれたり、けっこう大事にされた。

ところが祝賀あいさつで「なんで百姓やるんだ」「世の中の流れが変わっている」と言いたかったんだろうけど。自分としては希望に燃えて就農を決断していたわけで、それが印象的でした。「世の中はそうなんだ」と思った反面、「いつか見てろ」という気持ちになったことは確か。その頃は転換期でした。

■ 転機

北川辺では年間を通して安定して収入があるものということで、先輩方はトマト、キュウリ、ナス、イチゴなどに取り組んできた。

就農して近代化資金などを借りてハウスを建て、キュウリ栽培をしていた。田んぼは一町くらいだった。

転機は昭和62（87）年。義父（妻敏子さんの父親）が町長に就任。3町くらいの田んぼを引き受けることになった。

コメを大々的にやるようになり、それが第一の転機。一種の挑戦だった。耕作面積が増えて、「ちゃんとしたコメを作りたい」ということで「北川辺米の会」（2011年、県農業大賞を受賞）に入会しました。

故萩原熊三さんが先生でした。北川辺にコシヒカリを導入した際に、みんな倒れてしまった。コシヒカリは、田植えが遅く肥料が多いと倒状してしまう。萩原さんたち先輩は実践した結果、早く植えて穂が出る前に充実させる、充実する期間を長く過ごしていけば、コシヒカリの特性を生かした品質のものができるといって栽培技術を確立したわけです。米の会の功績です。

■ 集団化

平成7（95）年、ウルグアイラウンド交渉の後、国の補助でコメの乾燥施設を作った。その時に、地区の先輩と3人で「大曾営農集団」を立ち上げた。自分が一番若かった。あれは挑戦でした。よく多額の借金をしたと思います。

主に稲の収穫とか乾燥調整などを引き受ける。今は25軒から20町歩くらい。そのほか3人で計60町歩を借りて耕作しています。

大曾農業集団は20年も続いている。続いたのは3人が気持ちを合わせたからだだと思います。収入も、経費も3分の1ずつに分けている。「次の次」の担い手ができているので、成功かなと思います。

集団化の最初の目的は、やれる人がいなくなったときに、誰かが担い手にならなくちゃならないということだった。農地を守り、地域を守る、環境・景観を維持する。水田は治水の機能もある。集団化は意味があると思っています。





Topics Note

骨髄ドナー「実態知って」

■提供はかけがえのない体験

白血病など治療の難しい血液疾患を治すための骨髄や末梢（まっしょう）血幹細胞の移植は、提供者（ドナー）の慢性的な不足が課題となっている。「提供の実態がまだまだ知られていないのでは」とドナーを体験した俳優の木下ほうかさんは語る。

■きっかけは献血

木下さんが日本骨髄バンクにドナー登録をしたのは2004年ごろ。献血に熱心だった義兄の影響で、20代からたびたび献血をしていた。その場でバンクのポスターを見掛けたのがきっかけだ。

「詳しいことは知らなかったんです。骨髄提供についてはかなり負担がある、しんどいものだというイメージを持っていた。でも登録自体はわずかな採血で済むので、それならやってみよう」と

ドナー登録は献血ルームや保健所、各地で開かれるドナー登録会などでできる。申込書に記入し、腕の静脈から約2ccを採血するだけ。もちろん費用はかからない。

09年、患者と白血球の型が適合したという通知が郵送で木下さんに届いた。提供の意思の確認と家族の意向、健康状態や日程などを尋ねる書類が同封されていた。

■仕事の調整に悩み

「半分忘れかけていたのが急に本番となって、驚いた。ひとまず病院でコーディネーターからの説明と医師の問診を受け、健康状態を確認するための採血をしました」

その後は仕事のことで悩んだという。最大180日先の1週間から10日間のスケジュールを空けないといけない。そこに良い仕事が入ったらー。

「生きている中でいっときくらい、仕事が取れなくてもいい。たった1回、数日のことで人が1人救われるのであれば意義があるなあと考えた」

骨髄採取には不安はなかった。所属事務所や家族は反対した。「臓器を取り出すようなイメージを持っている人もいるので。でも結局は自分の意思で決めることだから」

実家のある大阪の病院で両親も同席し、最終合意書に署名。東京に戻り、骨髄採取後の貧血を軽くする自己輸血用に、800ccの血液を2回に分けて採った。

■患者からの手紙

採取の前日に入院し、翌朝、採取を開始。骨盤に注射針を2カ所刺し、2時間半かけて約1リットルの骨髄液を採った。

「全身麻酔から目覚めた時は病室。人によるようですが、僕の場合、痛みはゼロで拍子抜けしました。翌朝まで尿道にカテーテルを入れていて、それを抜く時は痛くて悲鳴を上げましたね」

3泊4日で退院し、その後の検査も異常なし。1年後、木下さんの骨髄を移植された患者から、バンクを通じて手紙が届いた。ドナーと患者の間では個人を特定しない形で手術後1年間に2往復まで手紙を交換できる。

「非常に丁寧で、重い内容で…。顔は見えないけれど、すごく喜んでおられる。僕のしたことは、それほど大したことじゃないのに。読むたびに泣けてきます」

ドナー登録者数は約47万人で伸び悩んでいる。登録は55歳の誕生日で取り消され、毎年約2万人がいなくなる。木下さんも19年で「卒業」だ。「骨髄提供は、かけがえのない経験でした。だからこそ多くの人に知ってもらいたい。若い人には取りあえず登録だけでもしてほしいな」